

相手を思うがゆえの 厳しさに気づいた時、 自らの生き方が見えてきた。

神戸教会 竹内庸江さん

5年前、庸江さんは、ストレスが主な原因とされる悪性脱毛症で髪の毛がどんどん抜け始めた。人に法を説く立場にあり厳しい母親は、心配するそぶりも見せずに、どんな姿になっても仕事は休むなという。しかし、誰よりも娘の病状を案じ、「自分のせいだ」と、母もまた心を痛めていたのだった。ある日、母は、かつらを用意すると、「仮に髪の毛がなくても生きていけるようになりなさい。このことはいつかあなたの宝になると思うし、私も宝にするから」と諭した。その言葉を励みに、病気と友だちになろうと決心したが、さらに全身の毛が抜け落ちるほど病状は悪化し、覚悟が揺らぐ。「病気と友だちになれない...」。生まれて初めて素直な気持ちを訴えた庸江さんに母は「あなたは頑張っている。つらい心のままでいいんだよ」と優しく受けとめた。この時、厳しい言動も優しさであり思いやりだと気づき、母の思いが胸に落ちた。庸江さんは、病気を克服するとともに、この先の人生を生きていく道しるべを見つけた。



優しさを

積尊しきそんは、鍛冶工かじこうの子チュンダが用意した食事によって死を覚悟されますが、自分に死に至る病やまいをもたらしたチュンダが人から責められ後悔しないようにと、弟子の阿難あなんに「積尊は最後の供養の食物によって涅槃ねはんに入られたのだから、あなたには大いに功德とく徳がある」と告げさせています。

人のかなしみやつらさを理解し、心から思いやる、いわば究極の優しさを教える話ともいえませんが、人のかなしみがわかるといえる点では、私たちもみな同じ心もっています。とはいえ、「とても積尊のようにはいかない」と私たちは思います。そこで積尊は、こう教えてください。さるのです。

あらゆる人を友とし、喜びを与えよう。苦しむ人を思いやり、手を差し伸べよう。人の幸せを念じ、ともに喜ぼう。とらわれを捨て、すべてを平等にいたわろう——「慈悲喜捨じじきしゃ」というこの四つの無量に広がる利他心りたしんを実践していれば、おのずと人に優しくなれるということでしょう。

立正佼成会